

人魚について

——むかし清の王朝がまたその榮華を誇っていたころ、南京に孟世叢という貴公子が住んでいた。幼いころに父母を亡くした彼は、巨万の富を独り占めしたばかりでなく、たぐい稀な美貌と才智にも恵まれていた。そのため彼は若い頃から遊蕩のかぎりをつくし、二十三三の歳にはすでに世の中の愉しみに飽きて、無聊の日々を過していた。いかに趣向を凝らした遊びを試みても、何か物足らなく思うのである。そんなある日のこと、一人のオランダ商人が彼の邸を訪れる。商人は人魚を売りにきたのだという。人魚と聞いて彼の心は躍った。即座に万金を積んで買うことに決すると、彼の前にガラスの水甕にはいった人魚が引きだされた。人魚はこのうえもなく美しい。彼は激しい昂奮におののく。彼は恋におちた……

菅原克也

大正六年、谷崎潤一郎が『中央公論』に発表した「人魚の嘆き」の梗概である⁽¹⁾。歛染の極みをつくして慄らず、世を厭うまになつていた貴公子は、人魚への狂おしいまでの戀情に身を焦す。だが、囚れの身をかこつ人魚の願いを遂には容れて、人魚を海に帰すべくヨーロッパへ旅立つ。海蛇に姿を変えた人魚を赤道直下の海に放つと、人魚はふたたび妖艶な姿態をあらわして、月の光を浴びつつ身を翻して海中に沈んでゆく——。そのような物語の帰結に、この作品の興味があるのでは必ずしもない。ここには、典雅な漢語を鏤めた文体とあい俟って、一つの美的世界の極致が示されている。呪われた異類への恋という非日常の設定を通して、美と官能への憧憬が語られている。その美的世界の描写に一編の主眼はあり、憧憬の強さに物語の興味はつながれる。「背徳の悪性を持つて」と同時に「習慣的な『美』を超越した、人間より

も神に近い美しさがある」とされる人魚は、「耽美派」「悪魔主義」を謳われた谷崎の美的観念を託すべき形象として、恰好のものであったのだらう。

谷崎の描く人魚は、一般に femme fatale (男を破滅させる女、妖婦) と呼ばれる文学的類型の一つのあらわれとして登場するかのごとくである。たとえば人魚を売りにきたオランダの商人は次のように言う。

又或る者は、人魚の恋が恐ろしさに、疎毛を慄つて逃げてしまひます。なぜと言ふのに、昔から人間が人魚に恋をしかけられれば、一人として命を全うする者はなく、いつとはなしに怪しい魅力の罠に陥り、身も魂も吸ひ取られて、何処へ行つたか人の知らぬ間に、幽霊の如く此の世から姿を消してしまふのです。

ただし、世上の歓楽に厭きた貴公子は、そのような人魚の恋にこそ限らない魅力を感じる。「女に溺れるならば、普通以上の女でありたい」と願ひ「現実を離れた、奇しく怪しい幻の美を求めて」いた貴公子は、人魚を見た瞬間「体中の神経が凍り付くやうな、強い、激しい、名状し難い魂の疎震を覚え」る。そして、異類へのかなえようもない恋の悲しみにひたる貴公子は「お前の悪性に触れたいのだ」と呟くのである。

「悪」のなかに美を求め「悪」のなかの美と官能に生の燃焼を求めようとする——それはとりもなおさず谷崎自身の美学であつたらう。善悪の二元論は美という至高のものの前に消失し、美への惑溺と憧憬のみが浮びあがる。二元論があるとすれば、それは生の倦怠と昂揚との対比であり、昂揚は日常性を超えたところのみあるとされる。

日常性を超えた美と官能。これを体現するものとしての人魚。人魚という存在は、なかば女であることで人間界との接点を持ち、なかば魚身であることで異界への憧憬をかきたてる。異類であることは、憧憬の対象がある距離を保ち続けることを保証するだらうし、そのことによって非日常が日常へと転落する可能性を予め封ずることになるだらう。人魚は美と官能をめぐる憧憬の力学を持続させる。美と官能への惑溺を許しながら、欲望の充足は永遠に引きのばされる。非日常が現実と化しながら、日常へと褪色することなく、非日常の輝きを放ち続ける。倦怠の入りこむ隙はない。憧憬と欲望が常に掻きたてられる。水壘のガラスを隔てて人魚と向ひあう南京の貴公子の姿は象徴的である。貴公子は人魚をわがものとしながら、人魚に近づくことができない。美と官能を具現する対象を目の前にしながら、越ええない境界を意識しなくてはならない。わずか一枚のガラスの壁でありながら、その距離は絶対である。

ところで、谷崎の「人魚の嘆き」にはもう一つの憧憬、もう一つの距離の力学があった。それは人魚の故郷とされる西洋への憧憬である。貴公子はまず人魚を売りにきたオランダの商人の「優雅で、端正で、而も複雑な暗い明るい情緒の表現に富ん」だ容貌に心を動かされる。そしてこの商人と人魚を見くらべて「容貌のうちに相似た特質のあること」を発見する。「美貌を以て任じて」いた貴公子は、自分が「支那の国土に住んで居る、黄色い肌と、浅い顔とを持つた人間」の一人であることをはじめて意識し、ついには次のような言葉を洩らすにいたる。

私は西洋と言ふところを、そんなに貴い麗はしい土地だとは知らなかつた。お前の国の男たちが、悉くお前のやうな高尚な輪廓を持ち、お前の国の女たちが、悉く人魚のやうな白皙の皮膚を持つて居るなら、欧羅巴は何と言ふ淨い、慕はしい天国であらう。どうぞ私を入魚と一緒に前前の国へ連れて行つてくれ。さうして其処に住んで居る、優越な種属の仲間入りをさせてくれ。私はもう支那の国に用はないのだ。南京の貴公子として世を終るより、お前の国の賤民となつて死にたいのだ。どうぞ私の頼みを聴いて、お前の乗る船へ伴つてくれ。

これに対してオランダの商人は、ヨーロッパの人間がどれほど美しくとも、この人魚以上にあなたを満足させることはできない。人魚はヨーロッパ人の理想とする崇高と端麗を具現している。それはヨーロッパ人の「詩と絵画との精髓」であり「此の人魚こそは欧羅巴人の肉体が、あなたの官能を樂しませ、あなたの靈魂を酔はせ得る、『美』の絶頂を示して」と言つて貴公子を宥めるのである。

さて、オランダの商人がヨーロッパの美の理想を示すと云い、南京の貴公子に限りない憧憬の念をよびさました人魚とはいかなる存在であつたのか。悖徳の呪われた性を具有する異類としての人魚とはいかなるものであるのか。ここで改めてその概観を試みてみることにしよう。とりあえずの手がかりとして「人魚の嘆き」から次の一節（オランダの商人の言葉）を引いてみる。

西洋の国々では、人魚はそんなに珍しい物ではありません。私の国は欧羅巴の北の方の、阿蘭陀と云ふ所ですが、私の生れた町の傍を流れて居るライン河の川上には、昔から人魚が住むと云ふ話を、子供の時分に聞いた事がありました。彼の女は時とすると、人間のやうな下半身を持ち、或ひは鳥のやうな両足を具へて、地中海の波の底にも大陸の山林水澤の間にも、折々形を現して人間を惑はす事があるので

す。

まず「ライン河」云々というのは、ローレライの伝説をさすのであろう。ライン川右岸に聳え立つこの巨岩には、古来数々の伝説が付会されていたが、十九世紀のはじめにC・ブレンタノが『ゴドヴィ』と『ラインのメルヒェン』という二つの作品でこの素材をとりあげるにいたる。後者には、この巨岩の中に隠されたニーベルングの宝を守り、永遠の若さと美しさを保つ水の精が登場する。彼女(ローレライ)は、ある山の頂で髪を梳りながら泣いているところを、湖を渡る粉ひきの若者たちに嘲られたため、嵐を巻きおこして彼らを溺死させるのである。このモチーフはJ・アイヒェンドルフやO・H・レーベンに引きつがれたが、レーベンの『ローレライ、あるラインの伝説』の巻頭を飾る詩において、巖頭で髪を梳る魔性の水の精というイメージが定着する。そしてこれが有名なハイネの詩に引きつがれてゆくのである。⁽²⁾

次に「彼の女は時とすると」以下について注記するなら、同じドイツの作家であるフーケーの『水妖記』の主人公ウンディーネや、メーリケの『美しいラウの話』のラウなどは、人間のような足を持つものとして描かれているし、海から上って町や村を徘徊する人魚というものも民話にしばしば登場する。また「鳥のやうな両足を具へて」というのは、明らかに

『オデュッセイアー』のセイレーンをさすであらう。セイレーンはここで言うように本来は半人半鳥の姿をしたものであるが、のちには半人半魚の女として描かれることもあり、⁽³⁾人魚というものの遠い祖型であると考えられるにいたっている。このように谷崎が理解する人魚は、上半身が人間で下半身が魚という典型的な人魚にとどまらず、広く水にゆかりのある異類をも含んだものとなっているが、これが人魚という存在を考える場合の一般的な合意事項となっていることは注意しておいてよい。すなわち英語でいうマーメイドというものも、ニクスあるいはナイアード(川、泉、湖などに住む妖精)と厳密に区別されることはまれで、これらはいずれも同じ範疇に属するものとされることが多いのである。

したがって、谷崎の言う「地中海の波の底にも」については、セイレーンのほかにギリシャ神話のネーレイス(海神ネーレウスの娘で五十人または百人の海の精)を考えてもよいであらうし、「大陸の山林水澤の間にも」では、すでに名を挙げたローレライやナイアードを考えてよいであらう。海であれ湖や川や泉であれ、そこに住むニンフ一般を人魚と同類のものとしてさしつかえはないのである。さらに言えば男の人魚であるマーマン(merman)に対する(merman)や、ギリシャ神話のトリトーン(海神ポセイドンの息子)、あるいはドイツ語でいうヴァッサーマンなどといった存在も忘れてはなるま

い。谷崎の言う人間、特に男を惑わす妖婦ではないものの、マーマンやトリトーンもまた半人半魚の姿をしたものだからである。

さて、このように水にゆかりのある異類一般を人魚として考えるとき、西欧の文学に数多く描かれることになる人魚の物語のもっとも早い例とされるのが、十四世紀のフランスで成立した『メルジーヌ』である。これは、民間伝承として流布していたものを、ジャン・ダラスが『メルジーヌの物語』として集成したもので、当時広く読者に迎えられ、のちに各国語に訳されたものである。次にその梗概を記してみよう。

メルジーヌはアルバニア(スコットランド)の王の娘で、母は泉の妖精である。王は妻に、お産の時の姿を見ないという誓いを立てていたが、妻がメルジーヌをはじめとする三人の娘を生んだ時、喜びのあまり妻との約束を破ってしまう。妻は驚きの叫び声をあげ、三人の娘とともに島へ遁れる。メルジーヌは長ずるにおよんで父を恨むようになり、妹たちと図って父とその財宝を山に閉じこめてしまう。これを聞いた母は怒り、三人の娘を罰する。こうしてメルジーヌは土曜日に、とに下半身が蛇となるべく運命づけられる。この呪いは、土曜日の彼女の姿を見ないと誓い、終生この誓いを守り通す男と結婚してはじめて解かれるものなのである。

さてここにレイモンという男が登場する。彼はポワティエ

伯の養子であったが、ある日二人で猪狩りに出かけた際、誤って伯爵を殺してしまう。悲しみにうちひしがれたレイモンがあてもなくさまよっていると、とある泉のほとりで三人の美しい娘たちに出会う。すなわちメルジーヌをはじめとする三人の姉妹たちであった。メルジーヌはレイモンに、もし自分と結婚するならば、あらゆる地上の富を与えようと言う。ただし土曜日は彼女の姿を見てはいけない。これが条件であった。恋に落ちた二人はただちに結婚する。メルジーヌは妖術を使ってリュジニヤンの城をはじめ数々の素晴らしい城を立てる。二人は幸せに暮せるはずであったが、生まれてくる子供は皆不具であった。ここにいとこの一人が、子供達の男親は別にあつて、土曜日の掟が秘密を解く鍵であるとレイモンに囁く。レイモンは胸中に芽生えた疑惑に抗しきれず、土曜の夜に妻の姿を覗き見る。入浴中の妻の下半身は蛇であった。レイモンは驚くが、目にしたものの秘密は心の奥深くしまいこんでいた。

レイモンの息子たちは、姿形ばかりか性格的にも不具であった。ことにジョフロワは非道な男で、弟と喧嘩したあげく、僧院に逃げこんだ彼を百人の修道士たちとともに焼き殺してしまう。報せを伝え聞いたレイモンは憤激のあまり妻を「蛇めー」と罵る。メルジーヌは気絶する。意識をとり戻した彼女は蛇の姿となって窓から姿を消す。レイモンは隠者となる

これは典型的な異類婚の物語である。メルジーヌの両親である王と泉の精の結婚。メルジーヌとレイモンの結婚。この二つの結婚においてはいずれも禁忌が課され、禁忌が破られることによって結婚が破綻する。これは異類婚の物語に類する設定である。男は相手が異類であることをしらずに結婚する。異類である女は、禁忌が犯されずすむかぎり、通常の結婚生活を営む意志をもつ。メルジーヌの場合、人間の男と結婚したのは、母の呪いを解くという目的を秘めてのことではあったが、それはあくまで彼女の側にもある事情であった。禁忌が犯された時も、夫に害が及ぶことはない。ただ妻が夫のもとを去らねばならないのである。メルジーヌの父が禁忌を犯した時、島に遁れた母は、ただありうべかりし幸福な家庭生活を思い、これを嘆くばかりであった。母が夫を思う気持ちの深さは、三人の娘が父を山に閉じこめた際、娘たちに呪いをかけたことにもあらわれている。またメルジーヌについていえば、蛇の姿となって夫のもとを去ったあとも、彼女はルジニヤンの城に憑く妖精となつて、代々城を見守り続けるのである。夫に危険な魔力が及ぶことはない。異類の女はある意味で貞淑な妻なのである。

したがってここに見る異類の女は、男を誑かし、破滅に追いやる妖婦ではない。むしろ家庭を守ろうとして実意を尽す

女である。土曜日ごとに蛇の姿となるメルジーヌはたしかに呪われた存在であるが、呪いは彼女の側にあるのであって、夫には関係しない。これは人魚というものを考えてゆくうえで記憶しておくべきことであらう。人魚は必ずしも人間に危害を及ぼすものではない。むしろ愛においては誠実だともいいうるのである。

ところで、泉の妖精であるメルジーヌが蛇の姿にかわるという点には興味深いものがある。一般に半人半魚といわれる人魚における魚という属性と、蛇という属性に連想のつながりを認めることができるからである。魚と蛇とはいずれも体表が鱗で覆われ、ぬめぬめとした粘液の感触を残す。足として二本に分れることがない。水に棲む魚同様、蛇もまた川を渡り海に潜る。絵画においても人魚と蛇は類縁のものとして描かれることが多い。例えばA・ベックリーンの「トリートンとネーレイイス」では、ネーレイイスが巨大な海蛇の頭を手をかけているし、「皿」においては、岩の上に横たわっている人魚のかたわらに浮ぶトリートンの死骸の首に、蛇が巻きついている。あるいはまた谷崎の「人魚の嘆き」において、人魚が南京の貴公子の前で海蛇に変身し、赤道直下の海で再び人魚の姿にかえていたことを思いだしてもいいだろう。人魚と蛇とが類縁のものであるということ、谷崎がどこかで学んでいたか、あるいは直観的にそう感じていたのか、その

いずれであるかは確かめようもないが（先に引用した西洋の人魚に関する叙述を読む時、谷崎が人魚という存在とその属性についてある程度の知識を蓄積していたことは疑いえないように思われるのだが）、文学作品としての「人魚の嘆き」に人魚——蛇という連想の環が定着されているのは注目しておいてよいことだろう。

さてこの人魚の変種としてのメルジーヌ（ただしメルジーヌの下半身は蛇ではなく魚だという言い伝えもある。蛇——魚の連想のつながり、ないし混同がここにもみられる。）について、C・G・ユングが分析心理学の立場から様々な指摘を行なっているのは興味深い。彼はメルジーヌを彼の用語にいうアニマの形象であるとするのだが（これに對置されるのがアニムスとしてのネプトゥーヌスである）、その議論の過程には、われわれの集合的無意識にうったえるメルジーヌ——人魚に関する深い洞察が含まれているので、以下彼の言うところ（に耳を傾けてみよう。ユングはまず意識と無意識の対立について次のように要約する。

意識の無意識に対する抵抗と無意識の軽視は、人間の心の發展における歴史的必然であった。さもなければ意識が意識として分化できなかったからである。しかし心というものは決してわれわれの意図に適うものではなく、自律的で無意識的なものである、ということ（をわれわれは忘れてしまってい

る。したがって無意識が頭をもたげると文明人は恐怖に駆られる。それを狂気と同じものと考えるからである。無意識を自律的なものであると見なし、それを一つの現実として経験することは、平均的なヨーロッパ人のよくなしうるところではない。

このように言うユングは、無意識の「補償的活性化」としてあらわれる夢についてこうつけ加える。

夢のなかにあらわれる形象は女性的なものであって、無意識の女性的性質を示すものである。その形象は妖精であったり、魅力的なセイレーンであったり、ラミア（蛇女）であったりするのであり、これが（無意識のなかを）孤独にさまざま人間をたぶらかし迷わせるのである。（……）パラケルススのメルジーヌもこれに似た形象である。⁽⁵⁾

無意識は女性的性質を持つという命題についての吟味は控えることにしよう。ここでは、ユングのいうアニマという概念を援用することで、メルジーヌ——人魚という存在について何が明らかになりうるのかを考えてみたいからである。ユングは、心のなかに無意識が表面化した際、意識を意識として分化させてきた人間は、これを狂気への接近とみなして恐怖にかられるという。その無意識は女性的性質を持ち、夢の

なかに現われる無意識の形象は女性であるというのである。そういった女性たち——妖精や、セイレーンや、ラミアや、メルジーヌが、男たちを魅惑すると同時に、何故恐怖すべき呪われた存在とみなされてきたのかという疑問を解く鍵がここにはある。すなわち、彼女たちは無意識の領域を顕在化させる形象であるがゆえに、意識を分化させてきた人間たちに恐怖のまなざしをもって見られてきた。無意識の領域——狂気と境を接する領域に属するとされるがゆえに、それを日常的な現実として受けいれることは難しい。それはあくまで恐怖すべき対象であり、おぞましくも呪われた存在なのである。一方、彼女たちは男たちの無意識のなかに潜む女性的原型であるアニメマの形象でもある。それゆえ、彼女たちは男たちを魅惑する官能的な存在としてたち現われる、男たちの憧憬の対象として、性的欲望を喚起する。原型的な女性像たる彼女たちは、男たちの理想の美をさえ体現しうるものとなる。こうして男たちの心には憧憬と恐怖、誘引と反発の力学が生まれる。対象となる異類は、男たちを誘惑するとともに、身の破壊をひきおこす呪われた存在として恐れられるにいたる。彼女たちは、男たちの心にアンビヴァレントな感情を誘発する、美しくも恐ろしい存在となるのである。

さて、ではユングの言う「パラケルサスのメルジーヌ」とはどのようなものなのか。高名な錬金術師であり、医者であ

ったパラケルサスにとって、メルジーヌという存在は如何なる意味を担うものだったのだろうか。

ユングによれば、パラケルサスの「長命について」で言及されるメルジーヌは、まず「心のなかにあらわれるウィジヨン」であると解釈される、ただしそれは、夢が一時的にもせよ現実とみなされるように、客観的な実在でもある。ところで、アニメマというものは特別な心理的状况で起る境界現象に属する。この心理的状况とは、人の一生に欠くべからざる土台を提供していた人生の粹組が危殆に瀕した場合をいうのだが、その際に人は、過去との紐帯を断たれるばかりか、未来への進路をも見失うにいたるのである。恐るべき暗闇にも喩えられるこのような状況に陥った人間の前に、奇妙ではあるが光明をもたらすものが浮びあがる。それがアニメマなのである。

そのようなアニメマの特性は、メルジーヌの物語によくあらわれている。レイモンは養父であるポワチエ伯を誤って殺してしまふ。彼が絶望の淵にうち沈んでいた時、彼に知恵を授けて凶運から救ったのがメルジーヌであった。すなわちメルジーヌは、集合的無意識の原型であるアニメマとして登場したのである。錬金術師としてのパラケルサスも無知の深淵をしばしば覗き見た。先へ進むべき方策を見い出せなかつた彼は、意識的に啓示としての夢に依存した。メルジーヌは魚または

蛇の下半身を持つか、蛇そのものと考えられていたが、啓示の神が蛇の姿をとるのは、広く一般的に認められるところである。錬金術師たちにとっての蛇は、バラケルスス以前にもメルジーヌとして知られていた。

このように説くユングは、バラケルススにおけるメルジーヌについて、さらに次のように言う。

メルジーヌは水の国に棲むニンフやセイレーンと同じ範疇に属する。「血液について」と題する論文において、ニンフは「夢魔」であるとされるが、メルジーヌの方は血液のなかに棲むとされている。「小人について」のなかでバラケルススは、メルジーヌは元来ニンフであったものが、ベルゼブル（魔王）に誘惑されて妖術を使うようになったのだと言っている。彼女は、予言者ヨナが鯨の腹のなかで偉大な神秘を目にした、その鯨の血筋を引くのだというのである。この血統は重要である。すなわちメルジーヌの生まれた場所は神秘の腹のなかであって、これはあきらかに今日われわれが無意識と呼ぶところだからである。メルジーヌは性器を持たないが、これはメルジーヌが天国の存在であることをあらわす事実である。というのも天国におけるアダムとイヴも性器を持たなかったからである。さらに言うならば、当時天国は水の下にあったのであり「今でもそう

である」。悪魔が天国の木に下りてきた時、天国の木は「悲しみに沈み」イヴは「地獄のバシリスク（伝説上の爬虫動物）」によって誘惑された。アダムとイヴは蛇に「魅せられ」て「奇怪な」ものとなった——すなわち蛇によって間違いを犯した結果、性器を獲得したのである。だがしかしメルジーヌは水に棲む生き物として天国的な属性を保ち、人間の血液のなかで生き続けた。血液は魂の原始的象徴であるから、メルジーヌは心として、あるいはある種の心理的現象として解釈できる。(……) 心理的変換の闕下のプロセスを知悉する者にとって、メルジーヌはあきらかにアニマの形象である⁽⁶⁾。

「メルジーヌは性器を持たない」という記述がどこから導かれてきたのか知るよしもないが、これはバラケルススにおけるメルジーヌという存在の天国的な属性を強調するためのものなのであろう（われわれの知る伝承のなかのメルジーヌは——子供を持った以上——性器を持っていたはずである）。それはともかく、ここに言われるアニマの形象としてのメルジーヌは、錬金術師にとっての啓示の契機であり、広く男たちにとっての救済の契機であった。原型的な女性像として、男たちの心に限りない憧憬の念を掻きたてるばかりか、男たちの魂を救うものでもあったのである。そのようなものとしてのメ

ルジューヌを祖型に持つ人魚という存在が、文学のなかにいかなるあらわれかたをするのか。これをさらに引き続きをめぐってゆく必要がある。(続く)

注

(1) 以下「人魚の嘆き」からの引用は『谷崎潤一郎全集』第四巻(中央公論社、昭和四十二年)に拠る。ただし漢字は新漢字に改めた。

(2) 以上ローレライについての記述は、鈴木満「女の水の精と人魚」(ドイツの伝説をたずねて 11、NHKラジオドイツ語講座二月号、昭和六十一年二月)に拠る。

(3) 例としてハーバート・J・ドレイパーの「ユリシーズとセイレン」が挙げられる。ただし、ドレイパーの描く三人のセイレンのうち、下半身が魚身であるのは一人だけで、残る二人は人間の足を持っている。つまり全く人間の女と変わるところがない。

(4) 『メルジューヌ』のテキストは *Melusine* (Slakine Reprints, 1974) が現在入手可能である。ただし梗概は *The Romans of Partenay, or of Lusignen: The Tale of Melusine* (Kegan Paul, 1866) 及び *A Dictionary of Fables* (Penguin Books) の *Melusine* の項目を参照し

て作った。

(5) C.G. Jung, *Psychology and Alchemy*, tr. by R.F.C. Hull (Routledge & Kegan Paul, 1968) 五二―五三頁。引用の前の要約は五十一―五十二頁。

(6) C.G. Jung, *Alchemical Studies*, tr. by R.F.C. Hull (Routledge & Kegan Paul, 1968) 一四三―一四四頁。引用の前の要約は一七六―一八〇頁。